

げいめんどぐう どうぐうがたようき
■ 黥面土偶と西日本初の土偶形容器
— 縄文・弥生の人体表現 守山市赤野井浜遺跡出土 —

遺跡名	赤野井浜（あかのいはま）遺跡
所在地	守山市赤野井町・杉江町地先
調査年度	発掘調査（平成 14～16 年度）、整理調査（平成 15 年度～）
調査原因	河川浄化施設建設
遺跡の時代	縄文時代～鎌倉時代
調査報告書	平成 21 年 3 月刊行予定
遺跡の概要	<p>縄文時代から平安時代にかけて機能していた、幅約 30 m の 2 条の川跡（河道 1・2 と河道 3）が見つっています。これらが、調査地内で合流して 1 条の川になり、琵琶湖に向かって注いでいる様子が確認できました。また、その川に挟まれた 3 つの微高地上で弥生時代の集落が見つっています。弥生時代の集落は、当初、平成 16 年度に調査した北側微高地上に弥生時代前期末から中期初め頃につくられ、その後、川を挟んだ平成 15 年度調査の南側微高地に集落が移動していることがわかりました。</p> <p>2 条の川跡からは、弥生時代前期から中期の土器、石器、木器などの遺物を中心に縄文時代晩期から平安時代の遺物が出土しています。これらの川跡からは、近畿地方では珍しい縄文時代晩期前半の屈折（像）土偶や弥生時代中期頃と考えられる最古級の準構造船が出土し、南側の微高地の方形周溝墓から弥生時代中期の木偶なども出土しています。</p>
調査成果	今回、整理作業中に、新たに黥面土偶と土偶形容器が出土していることが判りました。今回の報告では、これらに加えて、以前出土した屈折（像）土偶、木偶について紹介し、その意義について述べます。

1) 黥面土偶（げいめんどぐう）

特徴	扁平な顔の部分は、眉から連続した鼻を粘土で貼り付け、目は細い線で表現しています。口や耳は棒やへらのような道具で窪ませ、その口の中には縦線を、耳には穿孔が施されています。目や眉、額にかけては平行する細線でいれずみが表現されています。首より下は欠損してありません。
法量	長さ 3.4cm、幅 3.8cm、厚さ 1.1cm（顔の大きさ）
出土位置	川跡（河道 1 第 17 層）から、縄文時代晩期から弥生時代中期の土器、石器、木器などと共伴して出土しています。
時代	縄文時代晩期最終末（約 2400 年前頃）

- 類例** 黥面土偶の分布は、長野から愛知県にかけての東海・中部地域を中心に出土しています。近畿地方では、同じ守山市の^{はりまだじょう}播磨田城遺跡から縄文時代晩期後葉の例があります。
- 機能** 縄文時代晩期末までは、縄文時代の他の土偶と同様に生殖・豊饒・繁栄にかかわる信仰に使われていましたが、弥生時代頃から墓との関係が強くなり、副葬品的な様相も示すようになって考えられています。

2) 土偶形容器（どぐうがたようき）

- 特徴** 縄文時代晩期中空土偶からの伝統を引き、頭部が空き、容器として利用されたものです。目と口は工具で粘土を窪め、眉と鼻は粘土を貼り付けて表現しています。鼻の大半が剥落しているため、鼻の形状はよくわかりません。目と口の周りには細い線で囲われており、いれずみの表現、いわゆる黥面です。また頸には目や口の周りと同じように多条の細線が施されています。
- 従来、西日本地域では、弥生時代前期から弥生時代中期前葉にかけて頭部が空かず、黥面表現をもたない違った形態の人面付土器（第6図左下）が分布します。赤野井浜遺跡例のように人面の頭部にあたる部分が空き、黥面表現をもつ土偶形容器は、南東北地方を中心に分布しています。赤野井浜遺跡の例は、この土偶形容器の分布をさらに西に広げ、西日本地域で初の出土例となりました。
- 法量** 顔部分 長さ 5.1cm 以上、幅 3.5cm 以上 全体 長さ 6.2cm 以上
- 出土位置** 川跡（河道1第17層）で、縄文時代晩期から弥生時代中期の土器・石器・木器などと共伴して出土しています。
- 時代** 弥生時代中期前葉（約2200年前頃）
- 類例** 赤野井浜遺跡の例と同じように人面の頭部が空き、黥面表現を描く土偶形容器は、主に南東北地方から東海地方の東日本地域に分布しています。赤野井浜遺跡から地理的に最も近い類例は、愛知県の^{かちかわ}勝川遺跡の例があります。
- 機能** 南東北から北関東地域では、再葬墓と強い関連があり、骨壺のような機能や副葬品の可能性が考えられています。本来の分布域を超えて出土したものについては、別の用途があったと考えられています。

3) 屈折（像）土偶（くっせつどぐう）

- 特徴** 上半身や腕は欠損し、下半身のみ残っています。膝に相当する部分が剥離していることから、本来は、膝に手を当てた状態だったと推定できます。背中には^{さんさ}三叉文様をもち、足には指の表現があり、かなり丁寧に作られています。

す。赤野井浜遺跡のものは、女性器も表現されていることから座産を表しているとの考え方もあります。

法量	幅 6.5cm、高さ約 7 cm 以上
出土位置	川跡（河道 1）
時代	縄文時代晩期前半（約 3 0 0 0 年前頃）
類例	屈折（像）土偶は、縄文時代後期から晩期前半にかけて、東北地方北部（青森・秋田など）を中心に出土しています。赤野井浜遺跡と同じように三叉文様をもつ土偶は、秋田県麻生遺跡から出土し、同じような膝に手を当てている土偶は青森県八幡崎遺跡から出土しています。
機能	縄文時代の他の土偶と同様に生殖・豊饒・繁栄にかかわる信仰に使われていたと考えられます。

4) 木偶（もくぐう）

特徴	針葉樹の一枚板を加工して、頭部、胴部、脚部を表現した木製の偶像で、五角形の頭に目と口が彫り窪めています。顔の表現は無表情で、黥面土偶の表情の豊かさと比べて対照的です。
法量	長さ 63.2cm 以上、幅 6.5cm、厚さ 2.6cm
出土位置	川跡（河道 1 第 17 層）
時代	弥生時代中期前葉（約 2 2 0 0 年前頃）
類例	県下では、安土町大中の湖南遺跡で 2 例、野洲市湯ノ部遺跡で 4 例、草津市烏丸崎遺跡で 1 例、守山市下之郷遺跡で 1 例の出土があり、野洲川周辺に密集して出土しています
機能	木偶は、方形周溝墓や溝などから出土する例が多く、集落全体の祖霊神そのものを象徴すると考えられています。また、方形周溝墓の溝などから出土することもあることから、最後は葬送儀礼に使用されたものと考えられています。土偶は、女性を表現していますが、木偶は湯ノ部遺跡や大中の湖南遺跡から男女一対で出土していることから両方を表現しています。

5) 意義

晩期前半の屈折（像）土偶は北東北地方、黥面土偶は南東北地方から東海地方、土偶形容器は南東北地方から北関東地方を中心にそれぞれ分布しています。晩期前半から弥生時代まで、東日本に起源をもつ人体表現のある遺物（祭祀遺物）が出土したことは、弥生文化が西から取り入れながらも、精神的な部分にかかわる遺物が東日本と関わりが強いことを表しています。こうした土偶・土偶形容器などの祭祀は弥生時代中期の途中まで続き、赤野井浜

遺跡では、弥生時代中期中頃には木偶の登場と共に西日本的な祭式へと変化することがわかります。

縄文時代の終末から弥生時代中期にかけての黥面土偶、土偶形容器、木偶という3系統の人体表現遺物が同じ遺跡で出土した例は、全国的にみてほかにありません。このように赤野井浜遺跡は、東西文化の交差点であり、今後、これらの遺物を検討することによって、縄文時代から弥生時代にかけての人物表現をもつ遺物の意義を明らかにする上で重要な意味を持っています。

◎用語解説

げいめん
黥面

いれずみが顔にあるもの

どくう
土偶

主に縄文時代に粘土で作られた素焼きの像で、女性を表現し、生殖、豊饒、繁栄にかかわる母性に象徴する再生観念を表すものとされている。

どくうがたようき
土偶形容器

土偶の形をした容器で、蔵骨器として使われたものです。東海地方から南東北地域から出土しているものは再葬墓に関連している。

さいそうぼ
再葬墓

死者を穴などの場所で、一端、骨にしてから土器や別の穴などに埋葬し直した墓のことをいう。

もくぐう
木偶

人の形を象った木で作られたもので、目・鼻・口を彫り、手足はない。農耕に関わる祖霊神と考えられている。



正面

どうぐうがたようき

土偶形容器

(土偶の形をした容器で、頭部は空いている。目、口には黥面表現がされている。)



横

大きさ

縦：顔部 5.1cm以上全

6.2cm以上

横 3.5cm以上

* 顔の半分と首以下は欠



げいめんどぐう

黥面土偶

顔の大きさ

縦 3.4cm

横 3.8cm

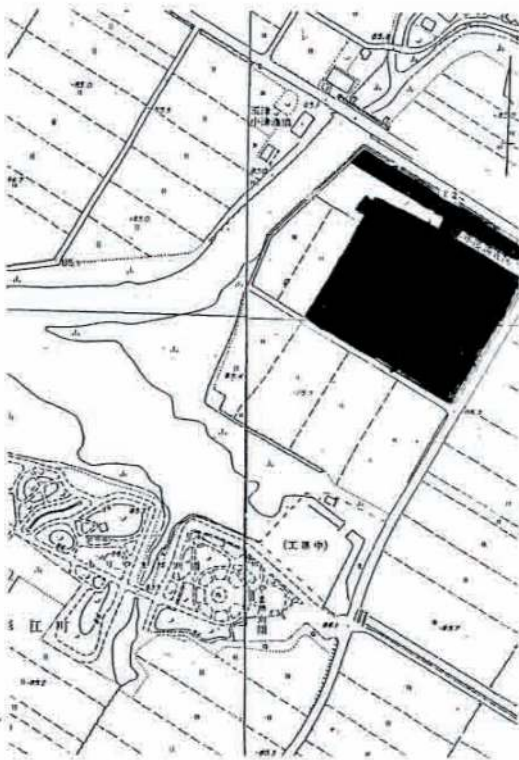
厚さ 1.1cm

* 首以下は欠損

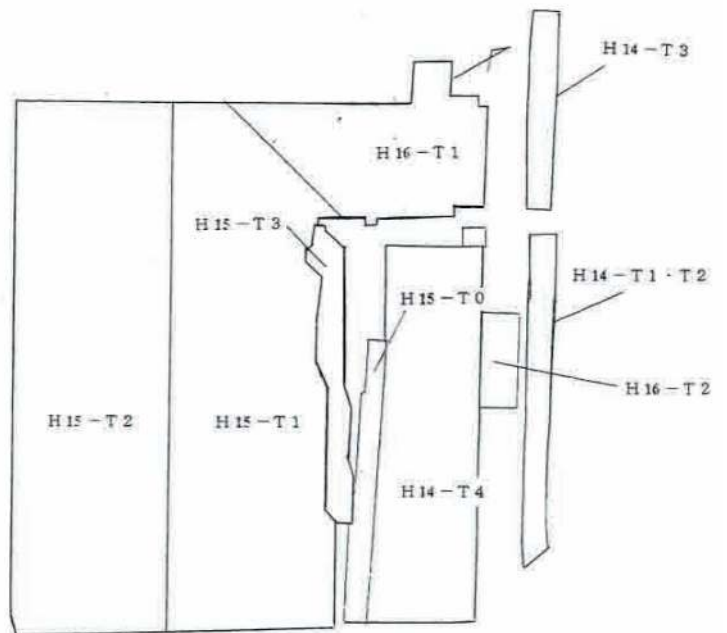
第1図 赤野井浜遺跡黥面土偶と土偶形容器



赤野井浜遺跡位置図

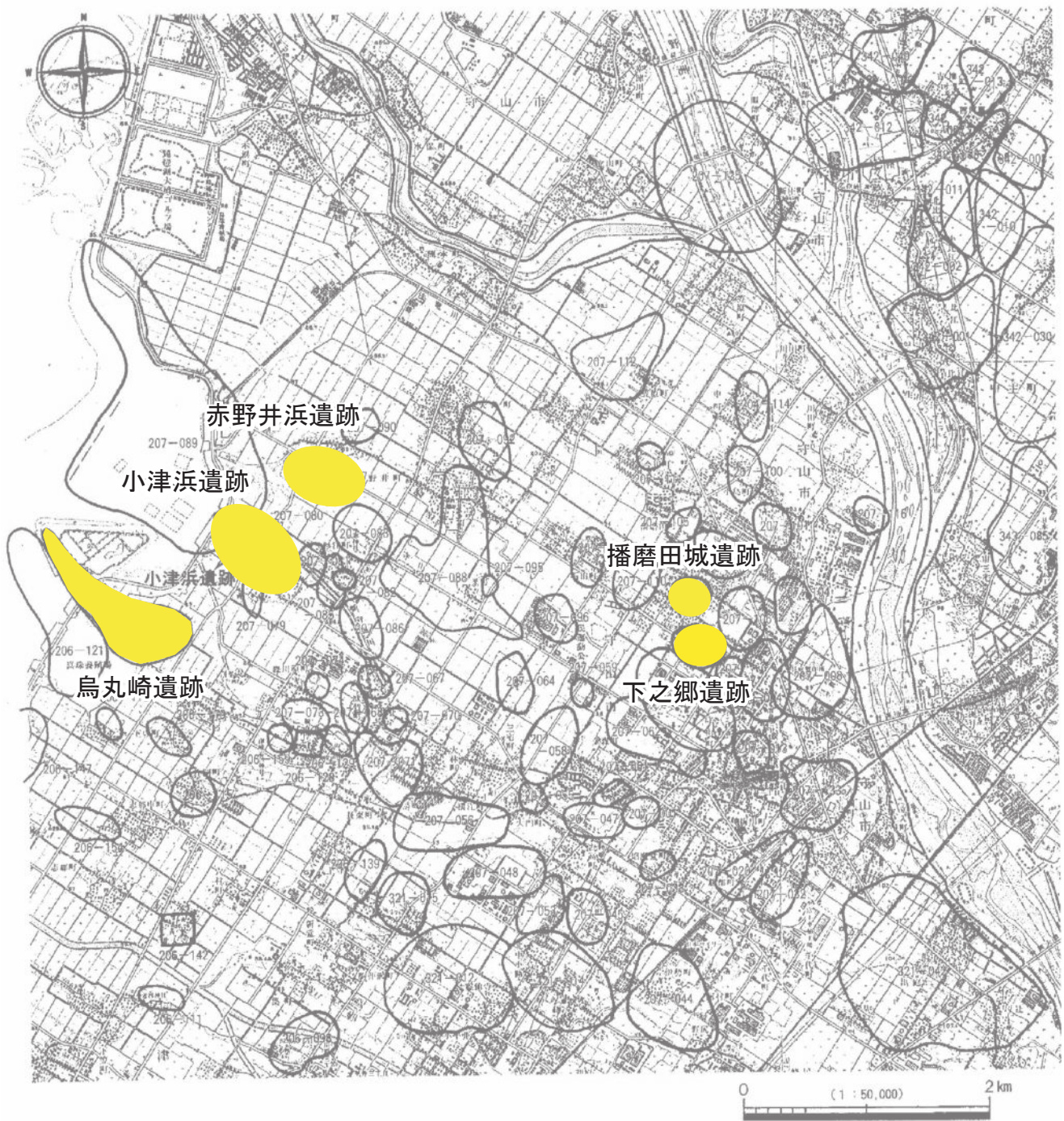


調査区位置図



各年度別の調査場所
(H14は平成14年度を示す)

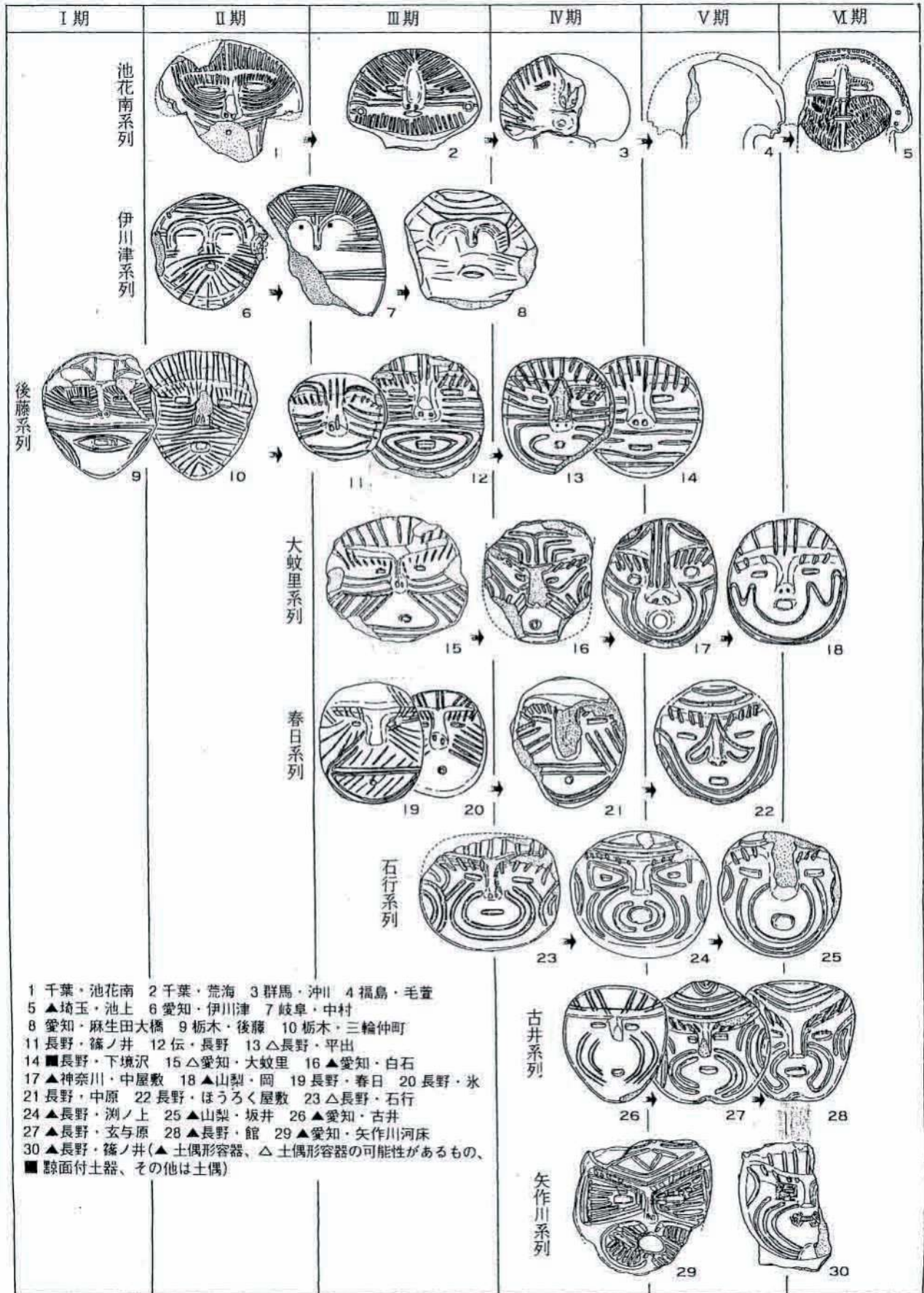
第2図 赤野井浜遺跡の位置と調査地区配置図



第3図 赤野井浜遺跡周辺土偶・木偶出土遺跡位置図

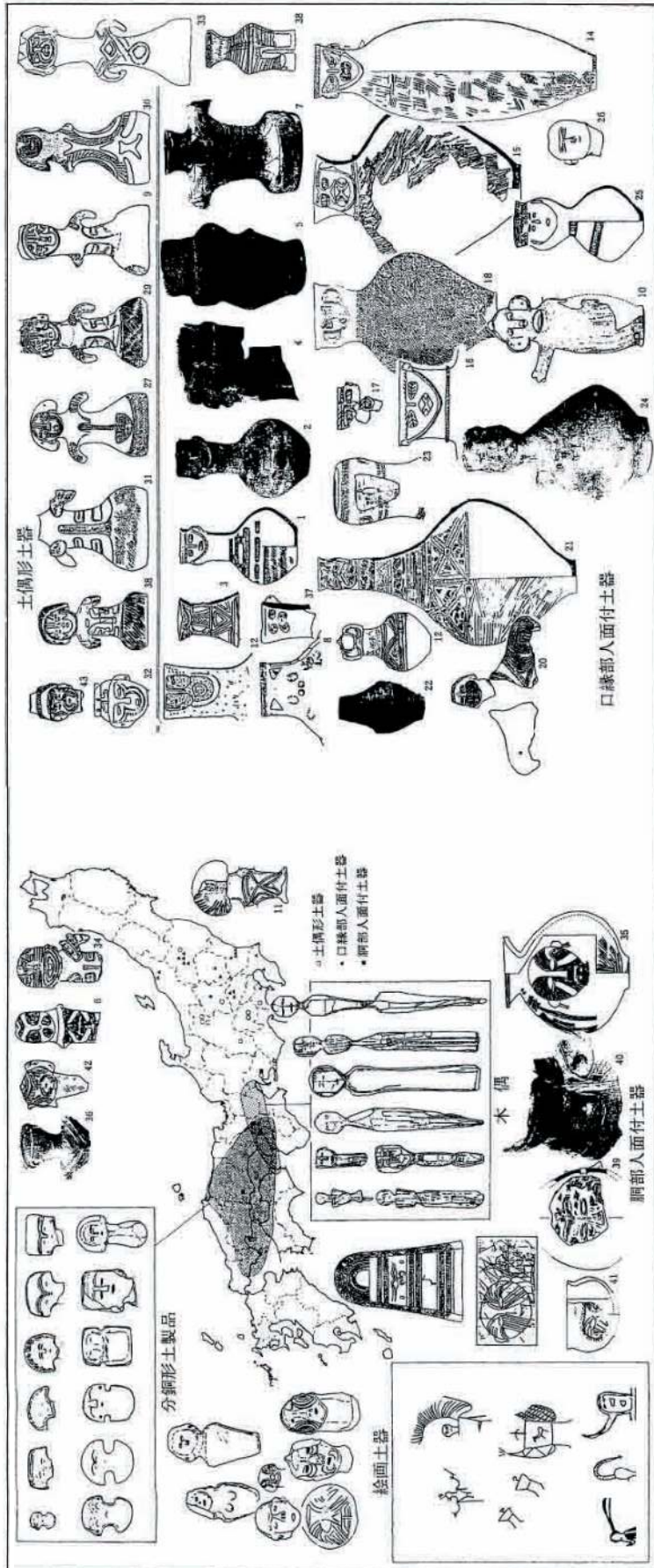
<p>縄文時代 晩期 前半</p>				
<p>赤野井浜遺跡 屈折土偶</p>				
<p>縄文時代 晩期 後半</p>				
<p>赤野井浜遺跡 黥面土偶</p>		<p>守山市播磨田城遺跡 黥面土偶</p>		
<p>弥生時代 前期</p>				
<p>守山市小津浜遺跡 土偶</p>				
<p>弥生時代 中期</p>				
<p>赤野井浜遺跡 土偶形容器</p>		<p>赤野井浜遺跡 木偶</p>		<p>草津市烏丸崎遺跡 木偶</p>

第4図 赤野井浜遺跡周辺出土土偶形容器・土偶・木偶



第5図 黥面の変遷 (設楽1989より)

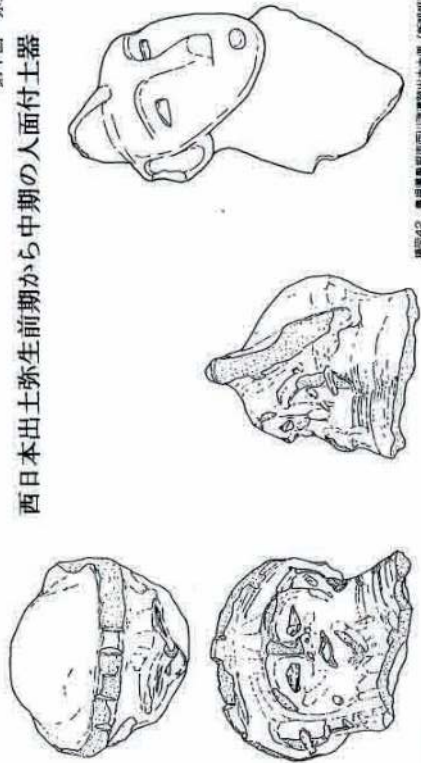
[縮尺不同]



第6図 弥生時代人物表現遺物の分布

第1図 弥生びとの風貌 (埼玉県博 1994 より)

西日本出土弥生前期から中期の人面付土器



目埒遺跡出土人面付き土器実測図 (鈴木博巳氏実測・杉本重彦実測トレス) - 標本42 鳥取県鳥取市(旧)深瀬町出土土器 (京都府京都市トレス)

所在地	遺跡名	遺跡	時期	所収品	遺跡名	遺跡
1	福島県高野村	福野遺跡	中期	千歳丸多古町	新橋	中期
2	福島県高野村	福野遺跡	中期	千歳丸多古町	新橋	中期
3	福島県高野村	福野遺跡	中期	千歳丸多古町	新橋	中期
4	福島県高野村	福野遺跡	中期	千歳丸多古町	新橋	中期
5	福島県高野村	福野遺跡	中期	千歳丸多古町	新橋	中期
6	福島県高野村	福野遺跡	中期	千歳丸多古町	新橋	中期
7	福島県高野村	福野遺跡	中期	千歳丸多古町	新橋	中期
8	福島県高野村	福野遺跡	中期	千歳丸多古町	新橋	中期
9	福島県高野村	福野遺跡	中期	千歳丸多古町	新橋	中期
10	福島県高野村	福野遺跡	中期	千歳丸多古町	新橋	中期
11	福島県高野村	福野遺跡	中期	千歳丸多古町	新橋	中期
12	福島県高野村	福野遺跡	中期	千歳丸多古町	新橋	中期
13	福島県高野村	福野遺跡	中期	千歳丸多古町	新橋	中期
14	福島県高野村	福野遺跡	中期	千歳丸多古町	新橋	中期
15	福島県高野村	福野遺跡	中期	千歳丸多古町	新橋	中期
16	福島県高野村	福野遺跡	中期	千歳丸多古町	新橋	中期
17	福島県高野村	福野遺跡	中期	千歳丸多古町	新橋	中期
18	福島県高野村	福野遺跡	中期	千歳丸多古町	新橋	中期
19	福島県高野村	福野遺跡	中期	千歳丸多古町	新橋	中期
20	福島県高野村	福野遺跡	中期	千歳丸多古町	新橋	中期
21	福島県高野村	福野遺跡	中期	千歳丸多古町	新橋	中期
22	福島県高野村	福野遺跡	中期	千歳丸多古町	新橋	中期

第1表 弥生びとの風貌一覧

■弥生時代から古墳時代の湖のほとりの人々

—守山市弘前遺跡の調査成果—

遺跡名	弘前（こうまえ）遺跡
所在地	守山市赤野井町・矢島町
調査年度	発掘調査（平成16～18年度）、整理調査（平成16～17年度）
調査原因	水質保全事業
遺跡の時代	弥生時代後期～中世
調査報告書	平成20年3月刊行予定
遺跡の概要	弘前遺跡は琵琶湖南湖の東岸、烏丸半島の西側にある赤野井湾に面する付近に位置します。平成16～17年度に水質保全対策事業に先立ち実施した発掘調査で、方形周溝墓、建物、井戸、溝、土坑、ピット群、耕作痕を検出し、弥生時代～中世に属する時代の土器類や石器、木製品が出土しました。これらの遺構や遺物から、当遺跡は弥生時代から鎌倉時代にかけての集落であったことがわかってきました。
調査成果	各調査区では現在耕作されている水田の下に、弥生時代から鎌倉時代にかけての遺構が重なり合って検出される層が確認されました。調査区によっては異なる時代の遺構が掘り込まれた層が積み重なって検出された部分もあります。現地の調査で確認した地層の状況や遺構の重なり合い方、整理調査で判明した出土遺物が属する時期の検討から、弘前遺跡が大きく4時期に分かれて営まれたことが判明しました。
弥生時代	中期から後期（約1800年前～2000年前頃）にかけて方形周溝墓が造営されました。平成17年度調査地区のうち、方形周溝墓が集まって築造された場所が2ヶ所検出されました。墓の周囲を巡る溝の中から弥生土器が出土しています。
古墳時代	古墳時代前期（4世紀頃）には弥生時代の方形周溝墓とほぼ同じ地点に方墳が造営されました。その後、中期（5世紀中頃）には東西に流れる溝などの遺構が現れ始めます。それに引き続いて後期の初め頃（6世紀前半）になると掘立柱建物が建てられ始め、その後建物の数が増えて行きます。また、東西、南北方向に掘られた溝もいくつか検出されています。 掘立柱建物は6世紀後半頃のものが多く、特に平成17年度のH地区で検出された掘立柱建物SB-03は柱間3間×5間、約5m×8mの規模を持ち、その大きさは周囲の建物よりも卓越しています。SB-03の傍らには井戸SE-01が掘られ、この2つの遺構と同時期に存在したと考えられ

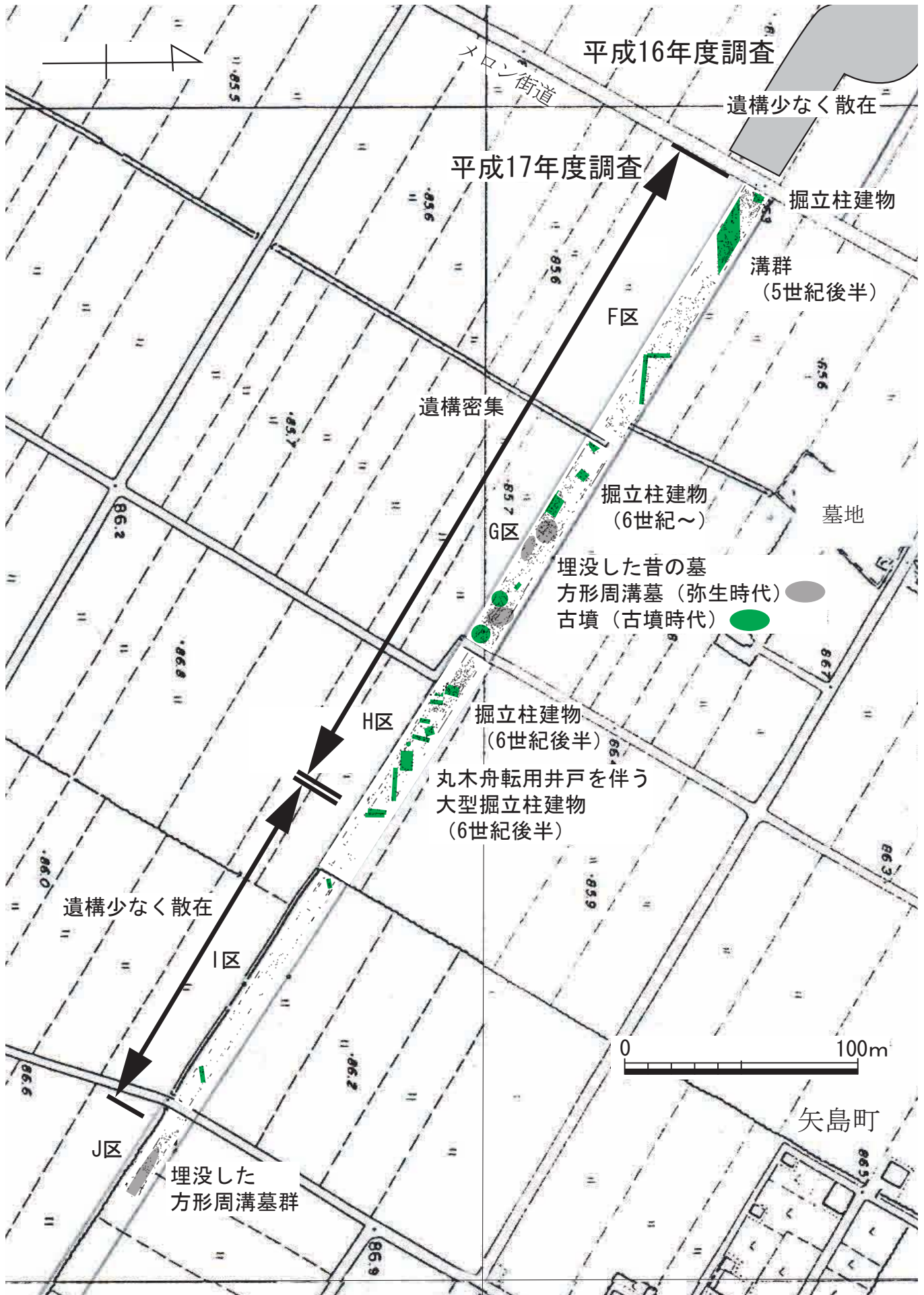
る2本の溝SD－05、06はこれらを囲む様な位置で検出されています。SB－03と軒を並べる建物はなく、SB－03と周囲の建物とは隔離されたような状態にあります。また、他の掘立柱建物はあまり密集せず、散在して建てられていたようです。井戸SE－01は丸木舟を井戸枠に転用したもので、県下で初の検出事例です。

この時期の主な出土遺物は土師器・須恵器（生産が開始された頃の製品を含む）、滑石製品（石釧破片、円板）、井戸枠に転用された丸木舟があります。

検出された遺構の配置状況からは、古墳が造営された墓域から、集落へと移り変わったこと、南北方向を軸とした赤野井町付近に見られる条里制施行以前の古い地割が弘前遺跡付近まで広がっている可能性が非常に高いことが明らかになりました。また、6世紀後半頃にはSB－03のような大型の建物や類例の少ない井戸を配置する区画が見られることから、弘前遺跡は古墳時代の一般的な集落とは異なる性格を持つ遺跡であったと考えられます。

飛鳥・奈良 掘立柱建物、溝、井戸、ピットなど検出。井戸や溝からは土師器・須恵器・平安時代などの土器類が主に出土しています。

中世 溝、ピットが検出されています。この時代の遺構は少なくなっています。





G地区 方形周溝墓と古墳



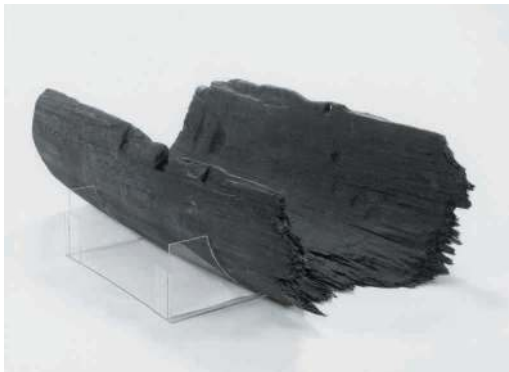
G地区 掘立柱建物



H地区 SB-03とSE-01



H地区 SE-01



井戸杵転用丸木舟 船体B



井戸杵転用丸木舟 船体A



SE-01 出土 土器
左3点 須恵器
右5点 土師器



F地区 溝群出土
石製品
上 石釧(破片)
下 円板

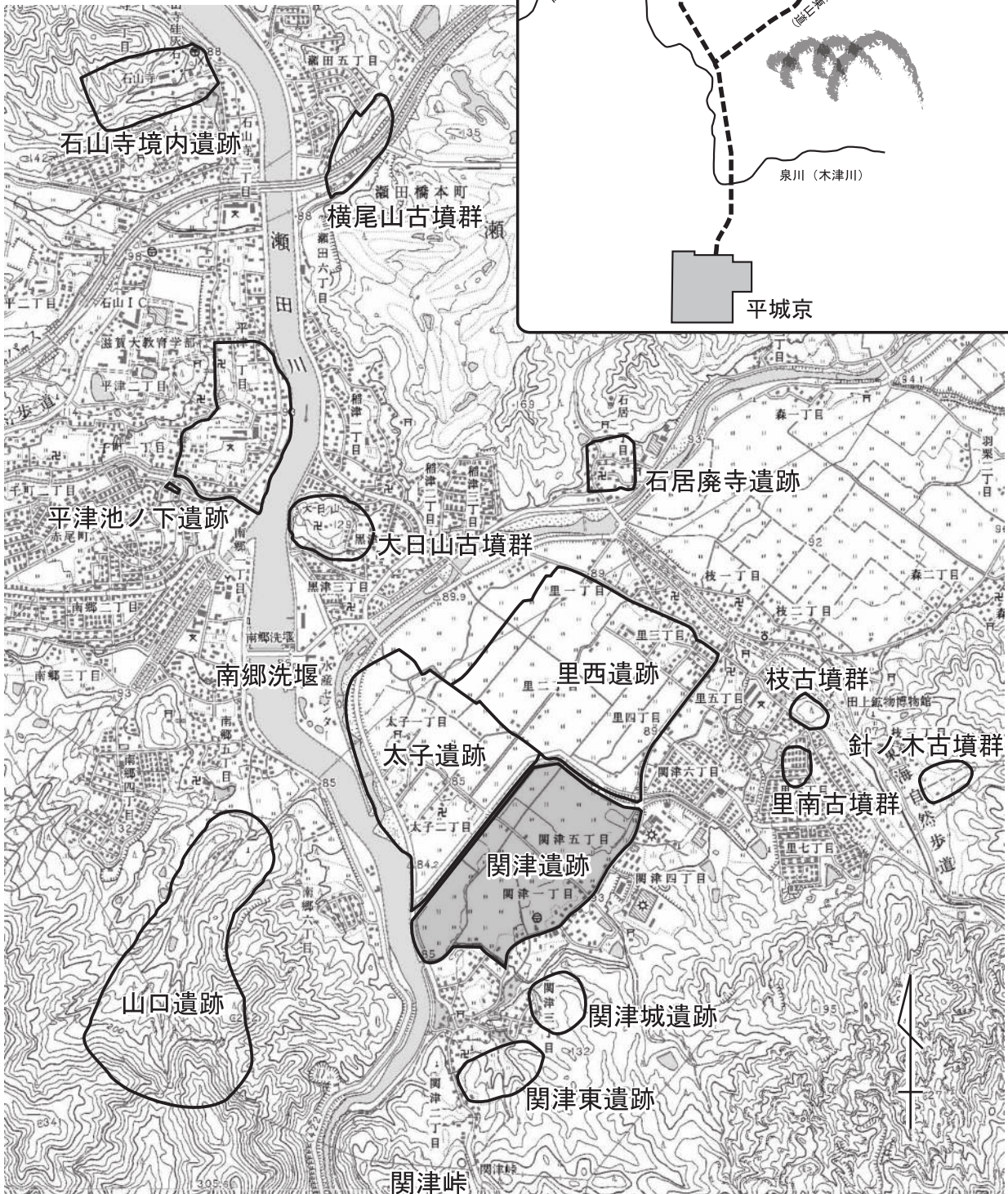
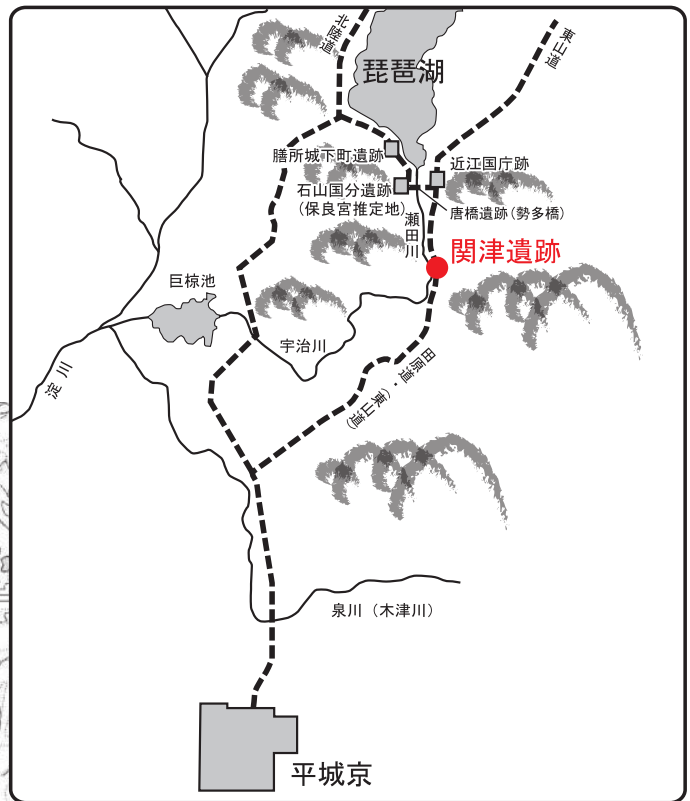


■近江と平城京をつなぐ道

—奈良時代の大阪市関津遺跡—

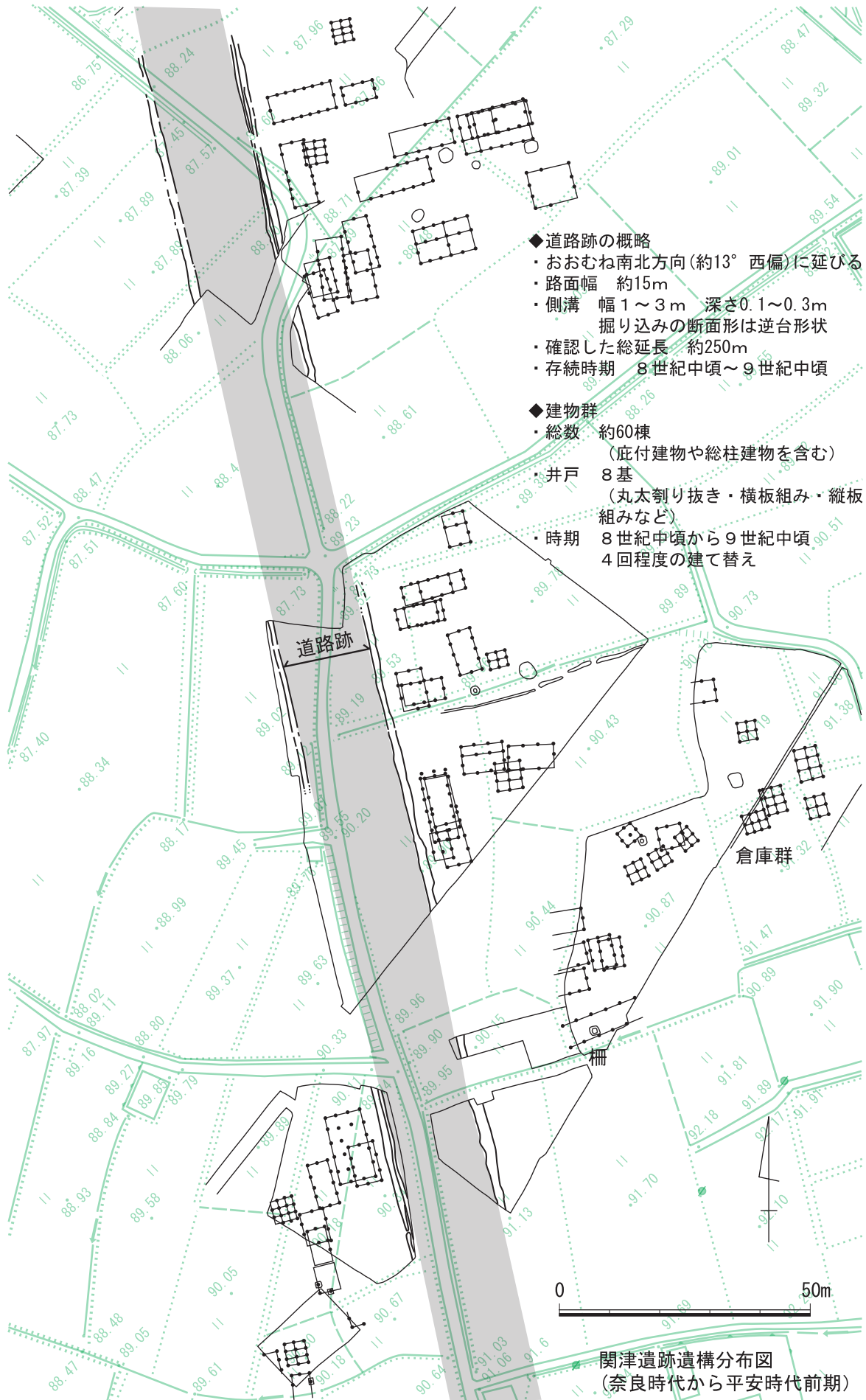
遺跡名	関津遺跡 (せきのついせき)
所在地	大阪市関津一丁目・五丁目地先
調査年度	発掘調査 (平成 15 ~ 19 年度 (予定)) 整理調査 (平成 16 ~ 21 年度 (予定))
調査原因	県営ほ場整備事業 (経営体育成基盤整備事業田上関津地区工事)
遺跡の時代	縄文時代~近世
調査報告書	平成 19 年 3 月刊行 (第 1 期) 『ほ場整備関係 (経営体育成基盤整備) 遺跡発掘調査報告書 34-2 関津遺跡 I』
遺跡の概要	関津遺跡は大阪市南部の田上平野の瀬田川沿いに位置し、水陸交通の要の地として近江の南玄関口ともいえる地理的な要件を備えた遺跡です。平成 15 年度から継続して行っている発掘調査では、縄文時代草創期から近世に至る遺跡の変遷が明らかになってきました。その中でも、国内最古級の飛鳥時代の墨書土器の出土や、奈良時代の東大寺や石山寺造営に使う材木の調達を担った田上山作所 <small>たなかみさんさくじょ</small> に関連する可能性のある建物群の検出、『続日本紀』記載の恵美押勝 (藤原仲麻呂) の乱に関わる「田原道」と見られる道路跡の発見などは、日本の古代史上の新知見として注目されている成果です。
調査の成果	今年度の発掘調査では、前年度に見つかった直線的に延びる 2 本の平行する南北方向の溝が、延長約 250 m にも及んでいることが確認され、その特徴などからその溝は奈良時代の道路側溝であることが明らかになりました。この道路跡は幅が約 15 m もある直線的な構造などから、国家が整備した官道もしくはそれに準ずる幹線道路である可能性が高く、奈良時代の歴史書『続日本紀』に記載のある恵美押勝の乱で、孝謙上皇方が仲麻呂方に先回りして馬を走らせた「田原道」であると考えられます。道の両側には向きを揃えて建てられた掘立柱建物や倉庫などがあり、建物構造や配置などから役所的な機能を備えた建物群であると考えられます。 整理調査では、道路の存続期間や周辺建物群の変遷などを調べるために、道路側溝や建物群周辺で出土した土器などの復元や観察・実測などの作業を行っています。土器は平城京での出土品と共通した特徴を持ち、墨書土器や硯、役人の帯金具、役所や宮殿での祭祀で使われる土馬などが出土していることなどからも、建物群は役所的な機能を備えて 8 世紀後半から 9 世紀初め頃まで存続していたことが明らかになってきています。

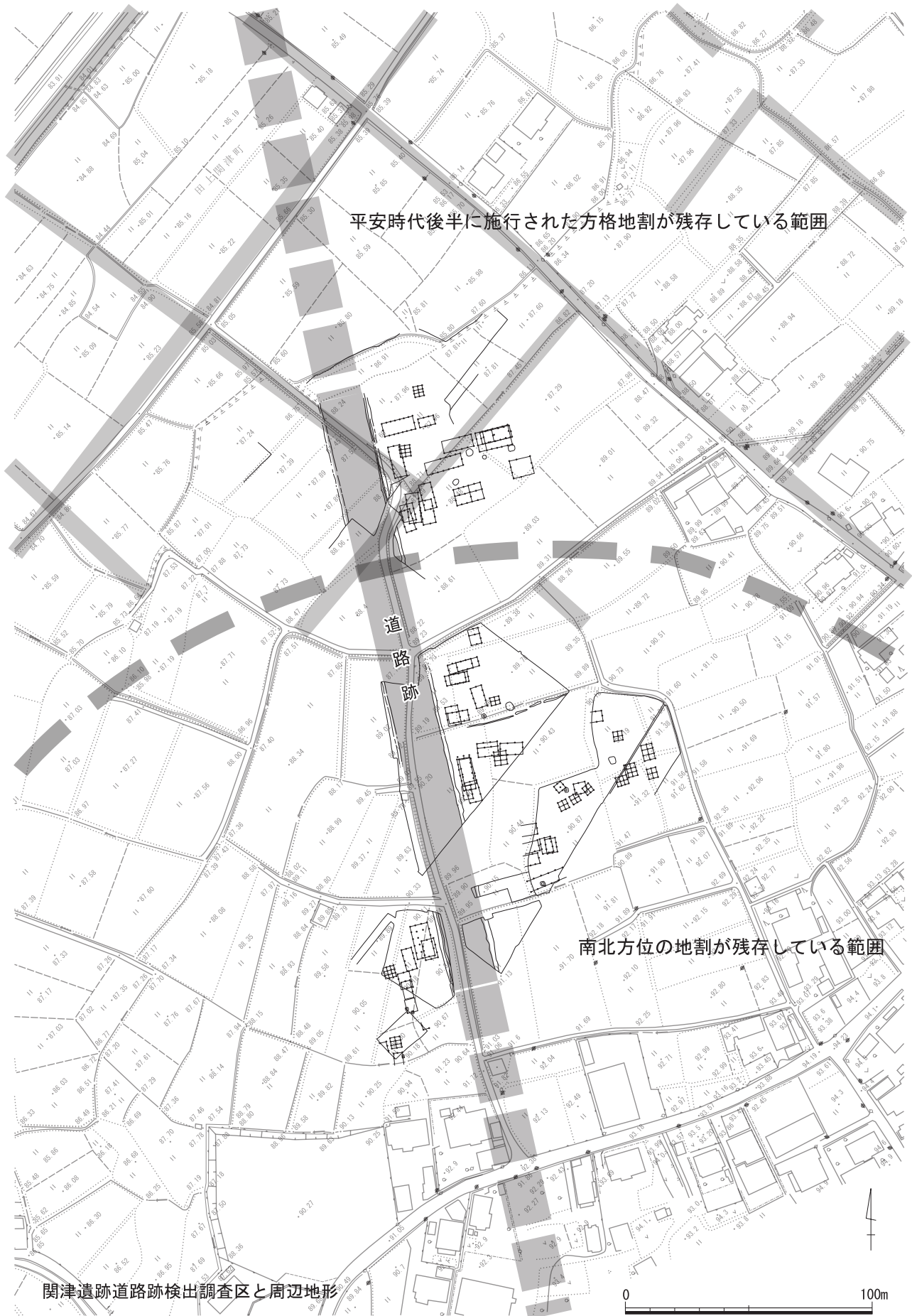
関津遺跡は奈良方面から京都府の宇治田原を抜けてくる山あいの道筋が、滋賀に入って最初に出会う広い平野部の入り口部分に位置しています。古代におけるこの道筋は大和と日本海・東北地方とを結ぶ幹線道路で、『続日本紀』には「田原道」として記載されています。発掘調査で見つかった幅約15mの道路跡はこの「田原道」と見られるもので、大和国と出羽国を結ぶ「東山道」のルートがこれに重なる可能性もあるなど、古代交通史上、注目される調査成果といえます。



関津遺跡の位置と周辺の主な遺跡







平安時代後半に施行された方格地割が残存している範囲

道路跡

南北方位の地割が残存している範囲

関津遺跡道路跡検出調査区と周辺地形





土師器 椀・皿



土師器皿内面の暗文



土師器 壺



須恵器 壺



須恵器 壺



須恵器 壺



須恵器 壺



緑釉陶器 椀

関津遺跡出土している奈良時代の土器の特徴は、その内容に宮都や官衙遺跡と共通する要素が見られることです。中でも土師器の杯や皿、壺などには器の表面に金属的な輝きを付加するミガキや暗文といった技法を施したものが多く、平城京から持ち込まれたと見られるものも含まれます。またそれらは杯・椀・皿・高杯・壺といった食器や貯蔵容器が多く、煮炊きに用いる甕などの炊飯具の出土量が少ない傾向にあり、見つかった建物群の機能を反映する特徴としても注目されます。



土師器 椀 墨書土器「上」



須恵器 円面硯

須恵器 獣形硯



灰釉陶器 風字硯



(正面)



(横)

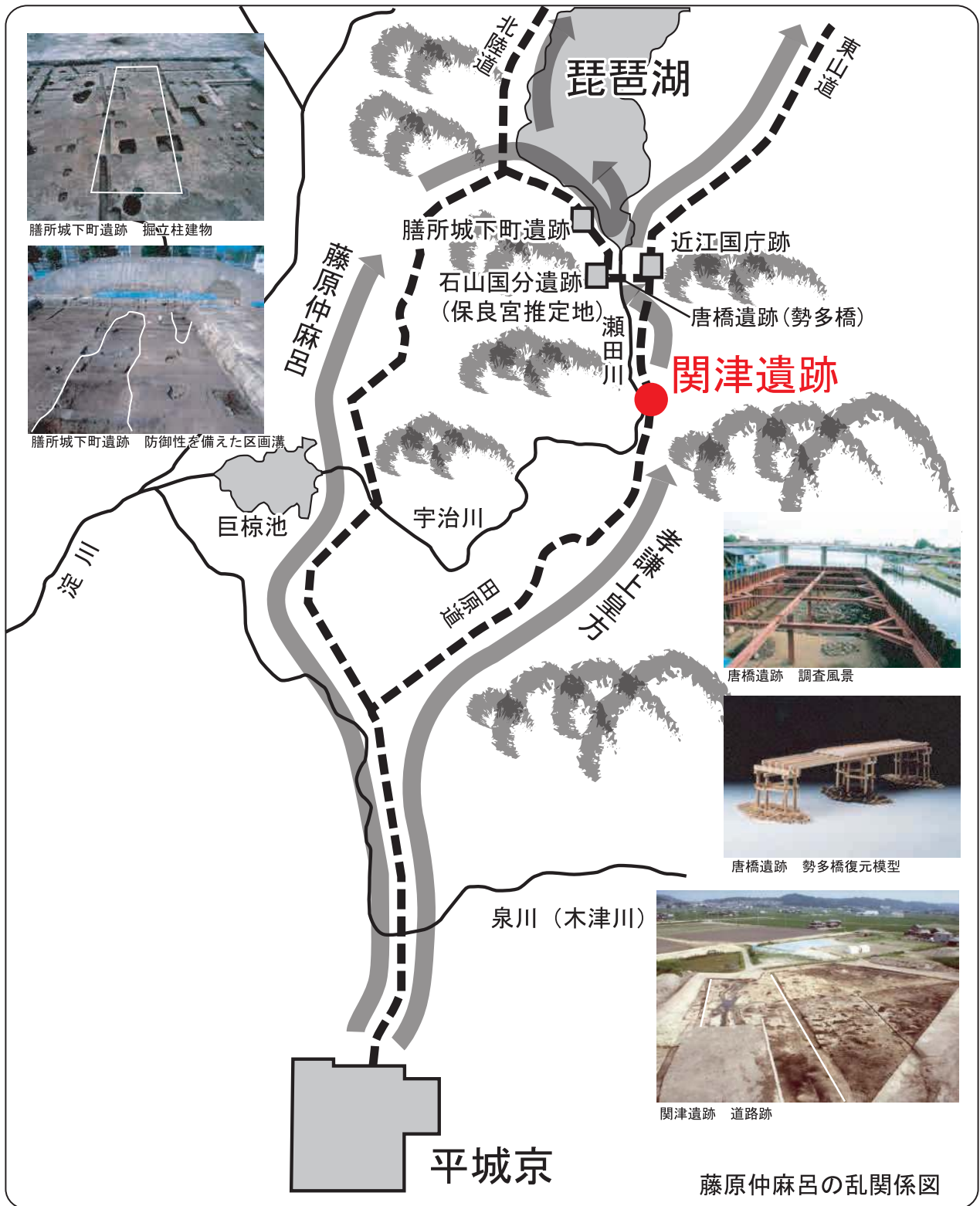
出土遺物の中には、20点近くの墨書土器や硯、役人が身に付けていた帯金具、土馬なども含まれており、ここにも宮都や官衙遺跡に共通する要素を見ることができます。硯や帯金具の出土は、実務を司った役人の存在を具体的に示すものであり、中でも龍を象ったかのように見える獣形硯や風字硯などは、地方官衙では出土することが少ない希少な出土品です。また、土馬の出土も穢れを祓ったり、雨乞いの祭祀の際に使われるなど、宮都や官衙などで行われることが多い祭祀に関わる出土品です。



帯金具 黒漆塗り銅製巡方



土馬



藤原仲麻呂の乱関係図

中宮院(淳仁天皇の御所)の馱鈴と内印を、高野天皇(孝謙上皇)が回収されると、ついに押勝(藤原仲麻呂)は挙兵して反乱を起こした。その夜、押勝は仲間を呼び招き、宇治から近江へ逃走し、ここを拠り所にしようとした。しかし山背守の日下部子麻呂・衛門少尉の佐伯伊多智らが、直ちに田原道(南山城の田原から竜門を経て、近江勢多に通ずる)を経て、先に近江にはいり、勢多橋を焼いた。押勝はこれを見て色を失い、直ちに高島郡に走り、前高島郡少領の角家足の宅に泊まった。

『続日本紀』天平宝字八年九月条(現代語訳:宇治谷 孟 講談社学術文庫『続日本紀』)

関津遺跡略年表

